

## 京都府内検出の水田遺構

竹原 一彦

### 1. はじめに

今からおよそ半世紀前には、弥生文化が稲作農耕の開始期にあたるという認識がもたれるようになった。森本六爾は、1933年に『日本原始農業』を出版し、「弥生式文化と原始農業問題」・「低地性遺跡と農業」を著した。特に前者においては、弥生時代の低地性遺跡では稲作農業がおこなわれ、人々は米を食料としていたと述べ、「当時の耕作地が水田であった」・「弥生時代の水田の制度そのものの具体的な、且つ積極的な研究は、今後のより整った且つより強固な遺跡考古学の発達に俟たねばならぬものが多いであろう。その大きさ、その形式共不明である」と述べ、その後の水田遺構の発掘に期待をかけていた。その10年後の1943年に戦火が激しくなる中、静岡県登呂遺跡が発見され、水田跡と住居跡の一部が確認された。大戦後の1947年には組織的な発掘調査が開始され、弥生時代の農村が水田を伴った形で初めて明らかとなった。登呂遺跡の発掘調査以降、これまでに明らかとなった水田遺構の調査は全国で300例に達している。水田遺構調査例の増加にともない稲作の初源も弥生時代から縄文時代に遡ることが明らかとなり、1980年には福岡県菜畑遺跡で縄文時代晩期中頃のの水田跡が発見され、最古の水田跡として注目された。1981年には本州最北端の青森県垂柳遺跡の調査で弥生時代中期の水田跡、1986年には砂沢遺跡で弥生時代前期に遡る水田跡が発見され、寒冷地での稲作技術の定着が初期段階で成し得ていたことが実証された。

京都府における水田遺構調査例は、1970年の向日市森本遺跡における弥生時代中期の水田跡検出例が初見となった。近年の調査で京都府内における水田遺構の検出例も増加してきたことから、これらの水田遺構の集成を行うことにした。知見では森本遺跡例以降、これまでに府下の13遺跡で水田遺構が検出されている。以下、水田遺構を検出している遺跡について述べることにする。

今回水田遺構としたものは「畦畔を伴う水田区画の検出」に限定し、水路のみの検出・土壌分析等から水田跡と推定された調査例は除外した。なお、稲株痕跡の検出等から明らかに水田跡と認識できるものに関しては水田遺構に含めた。また、本書で使用した水田遺

構図は報告書等から転載したものであり、一部加筆するとともに数次に渡る調査例では遺構図面を合体させた。

## 2. 水田遺構検出遺跡

### (1) 蔵ヶ崎遺跡

蔵ヶ崎遺跡は与謝郡加悦町に所在し、日本海に注ぐ野田川の中流域右岸の低台地及び小規模扇状地に位置する。名勝天橋立により画された阿蘇海に注ぐ野田川の河口から約8km、現在の野田川からは東約1kmの地点にある。蔵ヶ崎遺跡は、丹後地域でも数少ない弥生時代前期の遺跡として周知されている。蔵ヶ崎遺跡の周辺には、弥生時代中期の集落跡である須代遺跡・明石(桑飼小学校)遺跡が中位段丘上に存在する。特に須代遺跡では、明治26年に丘陵斜面から偏平鈕式流水文銅鐸の出土をみている。

蔵ヶ崎遺跡では、1990～1991年の道路建設に伴う発掘調査で奈良時代の水田遺構が検出された他、下層から弥生時代前期の水路(矢板列)と水田土壌が確認された。

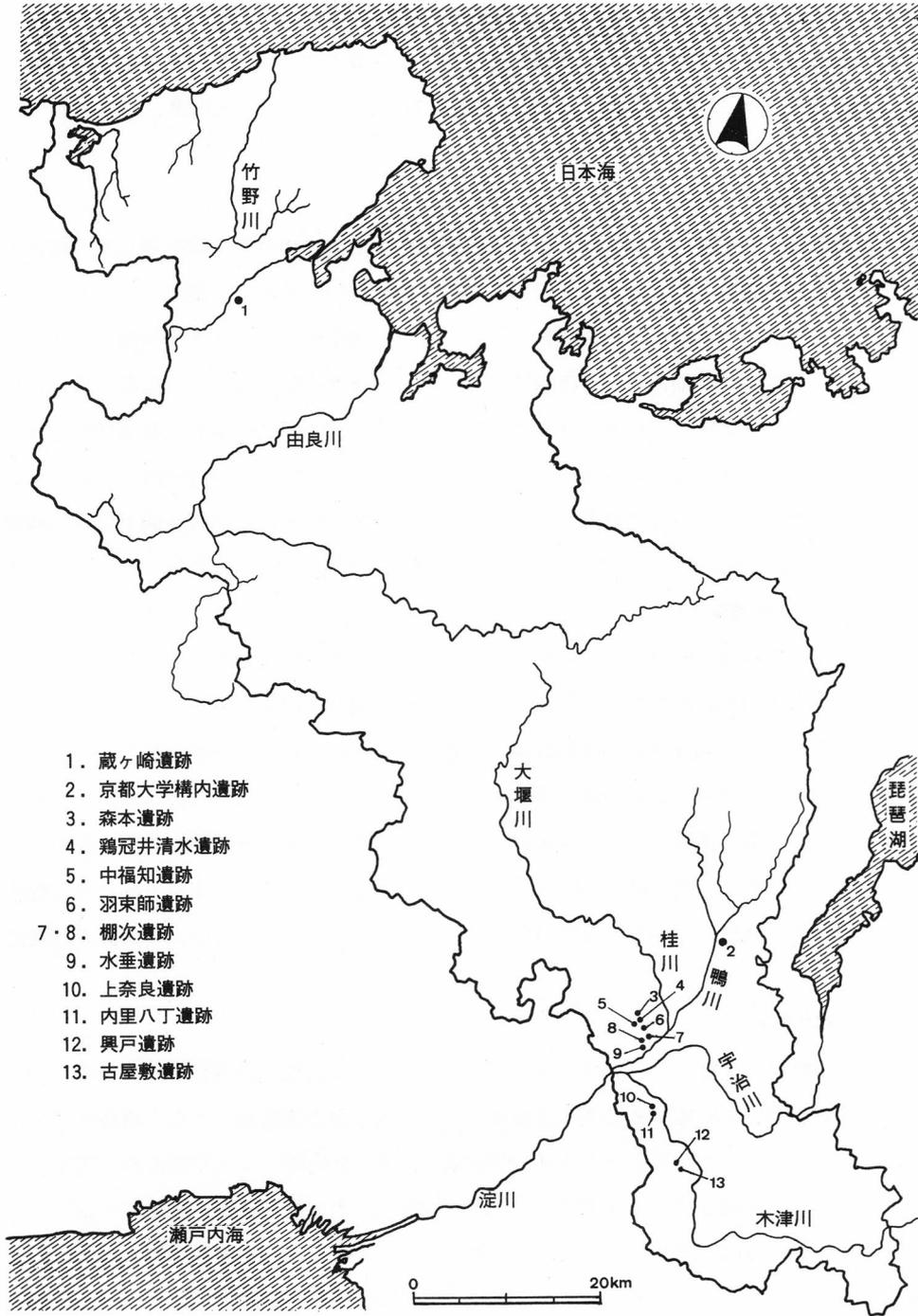
○弥生時代前期水田跡 海拔約6.3m付近に水田土壌とみられる黒色粘質土が広がり、杭・矢板列を伴う水路が検出されている。黒色粘質土の分析で多量の稲のプラント・オパールが検出され、水路内から木製農具(鋤・鋤)の出土をみていることなどから、畦畔は未検出であるが水田跡と判断される。水路跡の埋没は弥生時代中期後半であるが、出土土器の年代観から水田跡は畿内第I様式中～新段階と判断されている。

○奈良時代水田跡 海拔約6.8m付近から洪水砂に覆われた水田跡を検出している。小畦畔によって区画された4枚の水田跡が確認されたが、小規模なトレンチ調査の性格上個々の区画の形状は把握されていない。水田面には人の歩行による足跡の存在が確認されている。

### (2) 京都大学構内遺跡

比叡山西南麓の北白川扇状地にあり、京都市左京区吉田の京都大学構内に位置する。1993年の総合人間学部構内の調査において弥生時代前期の水田跡が検出された。水田面の海拔は51.5～51.9mに位置し、浅い谷状地形を利用した小区画水田が1.500m<sup>2</sup>の範囲で確認されている。水田跡は、同一遺構面で互いに接する水田跡で、特徴が全く異なる2つの水田遺構が並存している。水田跡は直線的に延びる主軸畦畔の方向性・水田面の起伏状況・畦畔の形状により、北側と南側に2分される。

○北半水田は、緩斜面の等高線に沿って南北方向に主軸畦畔を通し、その間に直交する畦畔(仕切り畦畔)を配置し、小区画水田を形成する。傾斜の緩い南部では仕切り畦畔の間隔が離れ、細長い短冊形区画の水田が広がる。北半水田では畦畔の断面形が蒲鋒形を呈し、



第1図 京都府内水田遺構検出遺跡位置図

耕作面には著しい凹凸が認められる。

○南半水田は、対照的に東西方向に細長い短冊形区画の水田である。畦畔は小ぶりで断面形は三角形を呈する。耕作面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。

全く特徴の異なる南北の水田の性格に関しては、現時点では春先の作業途中に土石流によって埋没したものと理解されているが、最終的な判断は今後の報告書に委ねられている。

### (3) 森本遺跡

森本遺跡は、長岡宮の東側、向日市森本町に所在する。弥生時代全般を通じての遺物出土が認められる遺跡として知られ、桂川右岸の沖積平野の西端部で、東南方向に舌状に張り出す向日丘陵の東裾の小河川扇状地に位置する。1970年の向陽第3小学校建設に伴う発掘調査で、弥生時代中期前半の灌漑水路と水田跡の一部が検出された。丘陵裾に沿って検出された灌漑水路は中期と後期の2時期の水路を検出し、いずれも杭と矢板が使用されている。中期水路の東側が水田域とみられ、トレンチ断面に畦畔の痕跡が確認されている。水田面は海拔約14.8m付近に位置する。また、森本遺跡に含まれる向日丘陵上では、西側約200m地点の調査において弥生時代の住居跡が検出されている。

### (4) 鶏冠井清水遺跡

鶏冠井清水遺跡は、向日市鶏冠井町と京都市伏見区久我町にまたがって所在する。遺跡は桂川右岸の沖積地に位置する。付近には弥生時代中期初頭の集落跡として著名な鶏冠井遺跡が存在するが、鶏冠井清水遺跡は遺跡・遺構の分布状況から、分離・独立した集落跡として認識されている。鶏冠井清水遺跡では、1987年に名神高速道路改修工事に伴う発掘調査で、長岡京期の遺構面下から弥生時代中期～古墳時代初頭の水田跡が検出された。トレンチ調査の制約上、水田跡の規模・形状は不明であるが、北西から南東方向に走る幅広な2条の畦畔を検出している。畦畔の間隔は約11mを測り、水田面には人の足跡が多数認められた。

### (5) 中福知遺跡

中福知遺跡は、向日市上植野町に所在する。遺跡は桂川右岸の沖積地に位置する。1990年に向陽高校西側の宅地開発に伴う発掘調査で、長岡京期の遺構面下から古墳時代前半期の水田跡が検出された。第3トレンチ(約260m<sup>2</sup>)では、小畦畔によって短冊形に区画された水田跡12枚が確認された。直線的な主軸畦畔は南北方向に延びるが、水田の主軸方向は東西と南北の2方向に分かれる。水田の規模は小さなもので約40m<sup>2</sup>前後を測る。水田面は現地地表下約2m付近から検出された。近接した調査地では同時期の旧河道跡・自然流路跡・杭列・しがらみ・畦畔が検出されている。



桂川右岸地域遺跡位置図(約1/50,000)

第2図 水垂遺跡水田遺構(拠、参考文献15~17)

#### (6) 羽束師遺跡

羽束師遺跡は、京都市伏見区菱川町に所在する弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺跡である。都市計画街路に伴う1982年の発掘調査で、長岡京期以前の条里遺構面の更に下層から奈良時代の水田跡が検出された。

○**条里遺構** 条里遺構として、東西方向の坪境と判断される溝と畦畔・杭列が検出された。畦畔は、幅約60cm×高さ約30cmを測る。

○**下層水田遺構** グリッド調査の制約上、水田規模・形状が不明な点が多いが、東西約180m×南北約10mの範囲から水田遺構が確認された。水田跡は、主軸畦畔が南にやや張り出す弧を描きながら、ほぼ北西から南東方向に延びる。主軸畦畔の間隔は約5mを測り、その間に直交方向の仕切り畦畔が配置されている。水田は細長い短冊形が基本形とみられるが、一部に5m前後の方形区画の存在も認められる。水田から7世紀代の土器の出土をみている。

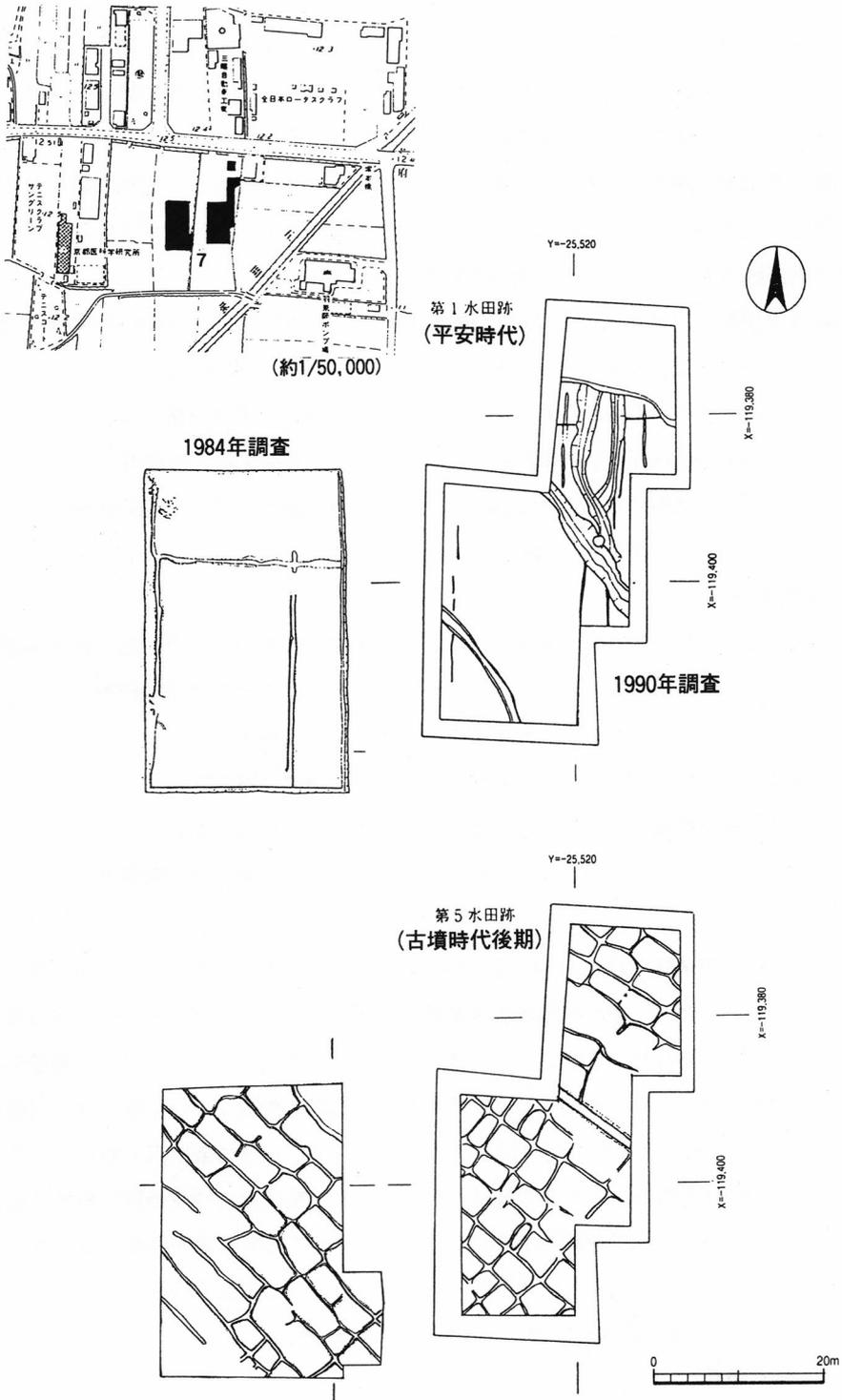
#### (7) 棚次遺跡

棚次遺跡は、長岡京市神足町棚次から京都市伏見区羽束師古川町にかけて広がる遺跡であり、桂川右岸の氾濫平野と小畑川扇状地の境付近に位置する。周辺には京都盆地で最初に稲作が始められた遺跡として著明な雲宮遺跡が南西部に広がるほか、古市森本遺跡・神足遺跡・下八ノ坪遺跡等の弥生時代遺跡が存在する。数次の発掘調査の結果、弥生時代～平安時代の遺構が検出されている。なかでも、1989～1990年に実施された長岡京左京五条三坊(乙訓郡条里の水將里六坪)にあたる調査では、古墳時代～平安時代にかけての5面の水田跡が検出された。また、1984年には西隣の調査地において、古墳時代と平安時代の2面の水田跡が検出されている。この調査地から南西約400m地点において1982年から3次(長岡京左京第84・87・107次)の調査が実施されており、平安時代の水田跡が検出されるとともに4条の畦畔が検出されている。ここでは、特に良好な水田跡を検出している長岡京左京五条三坊(水將里六坪)検出の水田跡を紹介する。

#### 長岡京左京五条三坊

○**第1水田跡** 海拔10.3～10.4mに広がる水田跡で、洪水砂礫が厚く覆う。遺存状況が悪いが、南北方向に延びる4条の畦畔と東西方向の畦畔1条を検出している。1984年度調査で検出した並走する南北方向畦畔の間隔は約16.5m、1989～1990年度に検出した畦畔の間隔は東西約10mを測る。水田は南北方向の長地形態であり、条里地割に関連するとみられる。また、水田面には人・偶蹄目の足跡が遺存していた。出土土器の年代観から、水田跡の年代は10世紀中頃と判断される。

○**第2水田跡** 第1水田跡下20cmで検出された。第1水田跡検出の畦畔とほぼ同一場所



第3図 棚次遺跡(長岡京左京五条三坊)水田遺構(昶、参考文献10・11)

で南北方向の畦畔が検出された。

○第3水田跡 第2・第3水田跡間は10～20cmの堆積がある。東西と南北に走る2本の水路が検出されており、水路の肩部には畦畔が伴う。また、東西溝の北側畦畔は第2水田跡の畦畔として踏襲される。水田跡の年代は奈良時代とみられる。

○第4水田跡 調査地北半から2条の畦畔が検出された。北西から南東に走る太い畦畔に1条の小畦畔が取り付く状況にあるが、明瞭な水田の姿はとらえられない。畦畔の上面は第3水田跡の直下(5cm未満)で検出された。

○第5水田跡 小区画水田約100枚が検出された。水田跡は、北西から南東方向に走る主軸畦畔と、これに直交する仕切り畦畔で区画されている。水田には7.5～50m<sup>2</sup>を越えるのものなど、バラツキが認められる。1989～1990年度検出の水田遺構では、調査区中央に幅約1.5m×高さ約20cmの大畦畔が走り、両側に水田が展開する。大畦畔によって区画された北側と南側の水田には高低差があり、北側水田は南側水田に対して約20cm低い。この水田跡の年代は古墳時代後期と判断されている。

#### (9)水垂遺跡

水垂遺跡は、京都市伏見区淀水垂町・樋爪町に所在し、桂川右岸の氾濫平野と小畑川扇状地の境付近に位置する。京都市清掃局埋立処分地の拡張工事に伴う発掘調査が、1990年から継続的に実施されている。これまでに、長岡京期の遺構面を挟んで上層から平安時代の条里遺構・水田跡、下層では古墳時代の水田跡が広範囲に検出されている。

○平安時代水田遺構 畦畔と溝が検出されている。特に坪境に相当する場所から推定通りに畦畔・溝が検出され、平安時代から現在に至るまで条里制区画が踏襲されていることが確認された。

○古墳時代水田遺構 北西から南東方向に緩やかに下る地形に沿って、大小の溝・旧河川跡が存在すると共に、多くの小区画水田跡が検出された。水田は海拔7.8～8.5m付近に営まれ、大畦畔・小畦畔・溝によって区画される。北西から南東方向に走る主軸畦畔は3～8mの間隔で設定され、その間に直交する仕切り畦畔を配置する。1枚の水田規模は30～150m<sup>2</sup>を測る。水田は方形・長方形を基本形とするが、一部に亀甲形も認められる。水田は、計画的に区画されたことが大畦畔の配置状況から窺える。中央地区に整然と広がる水田には、太くて高い大畦畔が約106mを区画単位として方形に地割りされる。また、その地割り単位を2分・3分する同様な畦畔も検出された。このような大畦畔による区画地割りは、「代制地割り」の可能性が高いと判断されている。

#### (10)上奈良遺跡

上奈良遺跡は、八幡市上奈良に所在し、木津川左岸の氾濫平野に位置する。1993年に工

場移転に伴う発掘調査が実施され、奈良～平安時代遺構面の下層から古墳時代初頭とみられる水田面が検出された。水田跡は海拔10.8m付近に広がり、洪水砂に覆われていた。畦畔の検出はみられないが、水田面から稲株痕跡と判断される小穴群が確認された。

#### (11)内里八丁遺跡

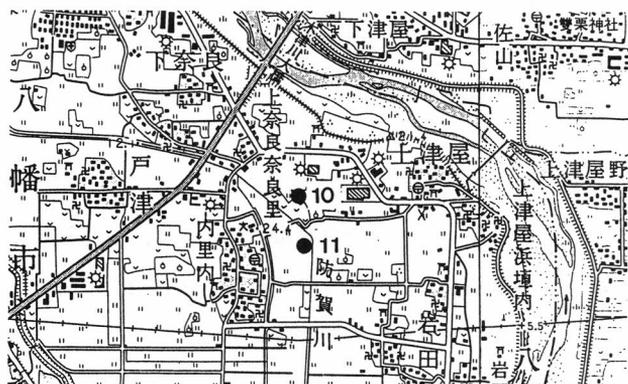
内里八丁遺跡は、八幡市内里に所在する弥生時代後期～鎌倉時代の遺跡として知られ、木津川左岸の氾濫平野に位置する。1988年から第二京阪自動車道建設に伴う発掘調査が継続されている。1991～1993年にかけて遺跡南部地域で弥生時代後期～古墳時代初頭の水田跡が検出された。水田跡は、北東に存在する埋没自然堤防の後背低地に営まれており、洪水砂に覆われた2面の水田跡が検出された。

○上層水田跡 水田面の海拔は10.8～10.9mであり、南東から北西方向に緩やかに下る浅い谷状地形を利用して水田が営まれる。水田土壌は暗茶褐色粘質土であり、半乾田であったと判断される。小畦畔で区画された水田は、方形および長方形を基本形とし、9～50㎡の小区画水田である。調査地南部のA地区では、南端部の水田主軸が南北方向であるのに対し、中央部は谷状地形を横断する東西方向に主軸畦畔が通る。特に谷状地形部の水田は、平面形・水田規模にバラツキが認められる。水田面には、稲株痕跡と判断される洪水砂の詰まった小穴群の分布が認められた。

水田跡の北東部は自然堤防の微高地が広がり、庄内併行期の集落を検出している。水田を覆う洪水砂と畦畔から同時期の土器の出土をみている。自然堤防の東側は沼地が広がり、D1地区南端部で西に延びる灌漑水路を検出した。同時期の水路が他に存在せず、多くの水田畦畔に水口が無いことから、掛け流し灌漑を行っていたと判断される。

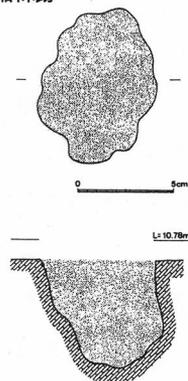
○下層水田跡 上層水田で確認された谷状地形はみられず、地形は南東から北西方向に緩やかに下る。水田土壌は暗灰色シルトであり、湿田であったと判断される。水田跡は上層水田跡の下約10～20cmに広がり、起伏の少ない同一面で2方向の主軸を持つ水田跡が検出された。水田域は、稲株痕跡の分布から上層水田跡と同様にB地区中央付近と判断されるが、畦畔は僅かにA地区西端部で検出されている。西南部で検出された畦畔は主軸畦畔が東西方向に延び、細長い短冊形の水田が認められる。主軸畦畔間は1～2m前後を測る。一方、北西部では南北方向に主軸を取る水田が存在する。

○稲株痕跡 稲株痕跡は、直径約5～7cm×深さ4～7cmの小穴であり、内部に微細な水田土壌を含む洪水砂が充満している。穴の周縁部は滑らかでなく、稲株の輪郭とみる輪花様の凹凸が認められる。水田面には、小穴がほぼ20cm間隔で80cm前後の範囲で緩やかな弧を描き、稲の移植単位とみられている。稲株痕跡は畦畔上にも存在し、畦畔を挟んで2枚の水田にまたがる移植列も認められる。整然と並ぶ移植列の検出で著明な岡山県百間川



上津屋遺跡・内里八丁遺跡位置図(1/50,000)

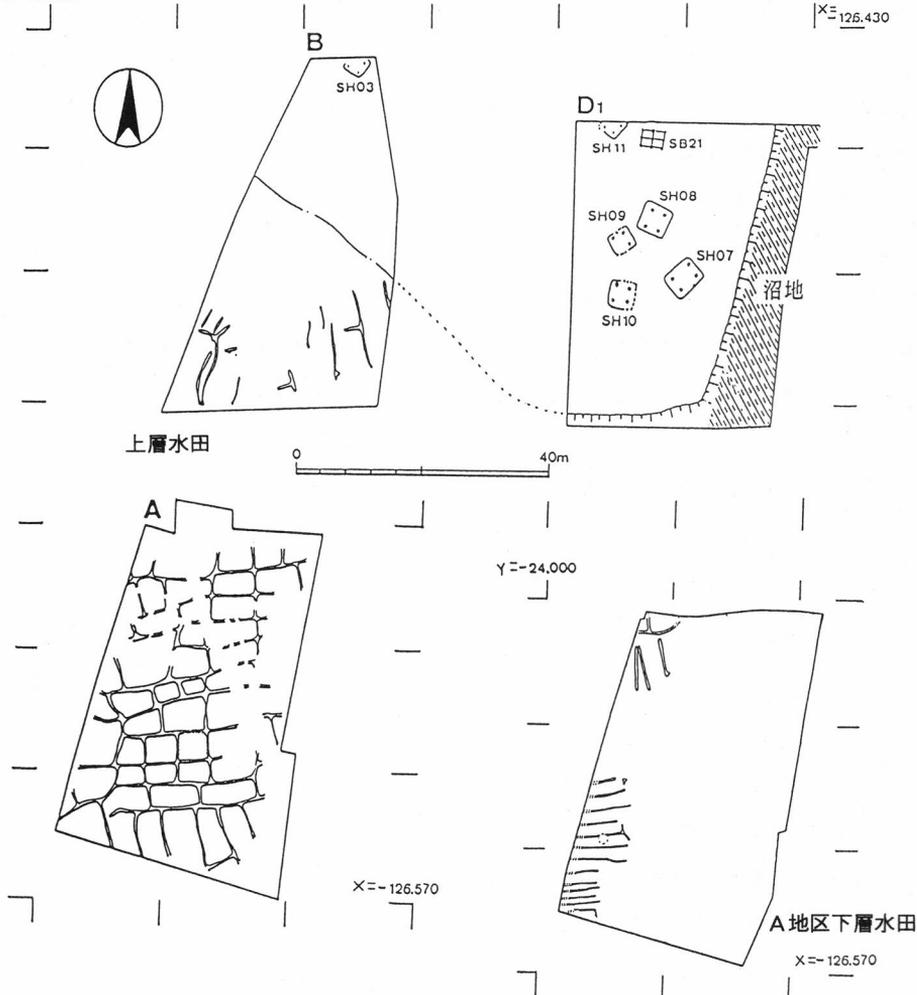
稻株跡



Y=-24.000

Y=-23.880

X=126.430

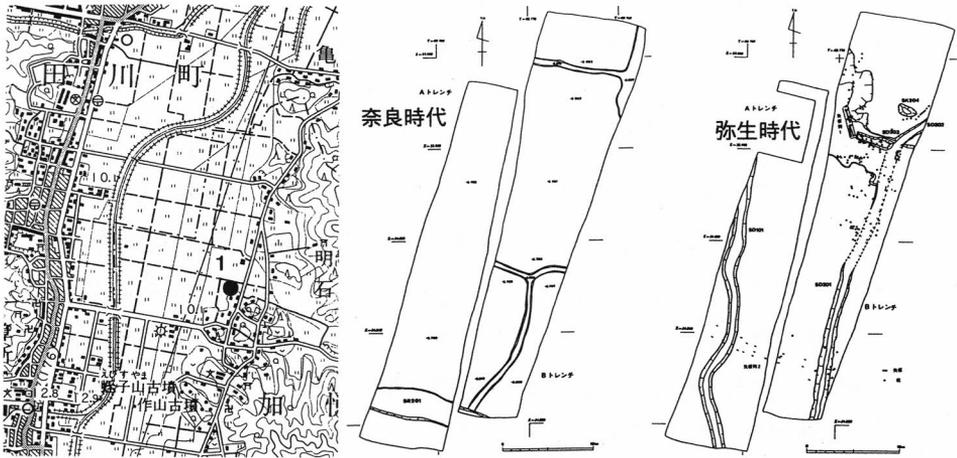


上層水田

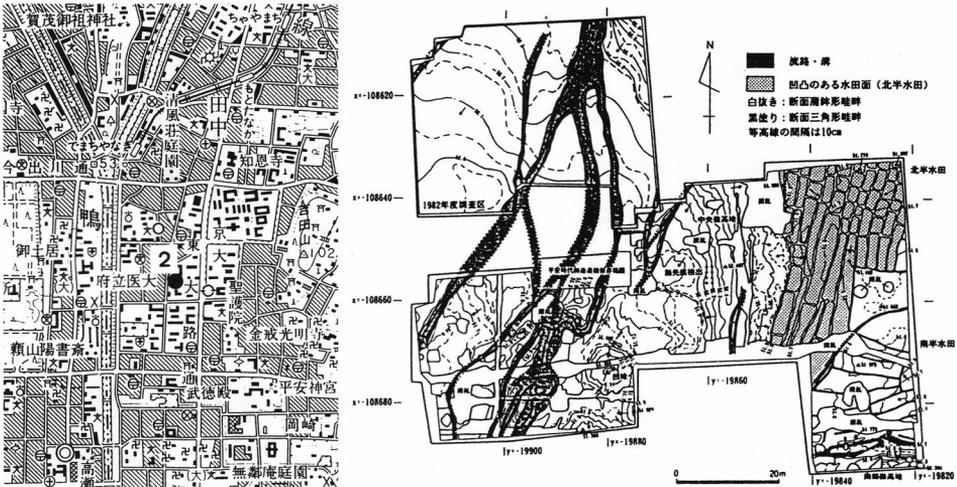
沼地

A地区下層水田

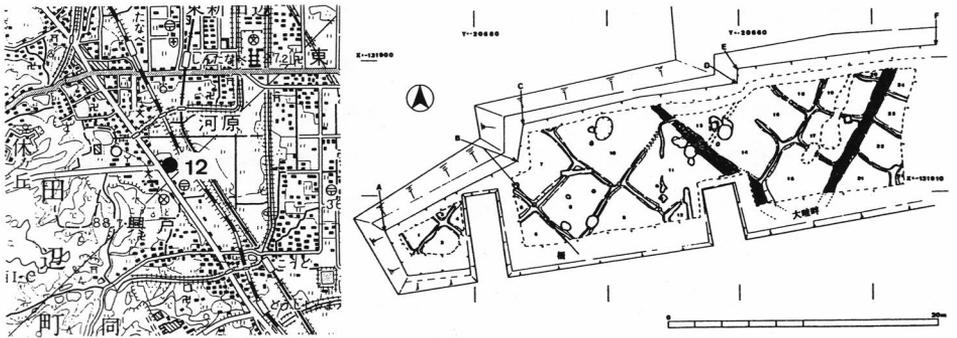
第4図 内里八丁遺跡水田遺構図(拠、参考文献20~22)



第5図 蔵ヶ崎遺跡水田遺構(拠、参考文献4)



第6図 京都大学構内遺跡水田遺構(拠、参考文献5)



第7図 興戸遺跡水田遺構(拠、参考文献23)

原尾島遺跡例とは異なり、当遺跡での稲株痕跡の分布は不規則である。当遺跡では水田を面的に埋めるべく、アットランダムな移植が行われたものと判断される。

#### (12) 興戸遺跡

興戸遺跡は、綴喜郡田辺町興戸に所在し、木津川左岸の丘陵裾の小河川扇状地に位置する。これまでに10次の発掘調査が実施され、縄文時代晩期～中世の遺跡として知られる。1991年の道路建設に伴う発掘調査で、中世遺構面の下から古墳時代後期の水田跡が検出された。水田は大畦畔と小畦畔で区画された小区画水田であり、24枚の水田跡が検出された。水田はほぼ方形であり、規模は10～20m<sup>2</sup>前後である。水田は南西から北東方向に下る緩い傾斜地に営まれ、畦畔の軸線も地形に合わせた方位を取る。水田は直交する2条の大畦畔によって大区画が設定され、さらに小畦畔で整然と小区画された水田の姿がみてとれる。水垂遺跡と同じく「代制地割り」ともみられるが、大畦畔による区画が不明な段階であり、確証を得られていない。今後の周辺地での調査成果に期待が寄せられる。

#### (13) 古屋敷遺跡

古屋敷遺跡は、綴喜郡田辺町三山木に所在し、木津川左岸の丘陵裾の小河川扇状地に位置する。遺跡の丘陵裾部付近は古代山陽道の山本駅推定地として周知されている。1980年に木津川左岸沖積地の発掘調査で、近世の畦畔が検出された。真南北に整然と区画された現条里畦畔の下層から、2層の畦畔がほぼ同位置で確認された。下層水田は16世紀、上層水田は17世紀以降と判断されている。

### 3. まとめ

過去2千数百年間、人々が食料としてきた米の生産基盤は、集落周辺の沖積地を中心としてきている。過去、沖積地では数多くの発掘調査が実施されてきたが、発掘調査件数に比べ水田遺構の検出は極僅かである。国内において初めて水田遺構が登呂遺跡で発見されて以降50年が経過し、縄文時代晩期～近世の水田跡の調査例も近年特に増加している。

京都府も他地域と同様に、ここ10数年間で相次いで水田跡が検出されてきた。これまでに実施されてきた発掘調査の多くは、集落・墓地等に関連する遺構の調査を主目的に進められ、水田跡の調査は偶然性に頼るところが多い。沖積地の調査では、水路跡を検出するとともに周辺で水田の耕作土とおぼしき土壌がしばしば確認されるが、明瞭な畦畔の検出か一定量の遺物の出土がなければ、主たる調査対象から除外される傾向にある。水田跡は、水田から盛り上がる畦畔で水田区画が検出されない限り、視覚的に認識することが困難な遺構である。洪水等の自然災害に因って埋没・放棄された水田跡は、水田土壌と洪水砂等の堆積土との分離が比較的容易であるが、このような条件に恵まれた水田跡は極僅かである。

京都府内検出の水田跡も、洪水・土石流に伴う土砂が水田を覆い、特に畦畔が良好に遺存していた遺跡で、面的に水田遺構が検出されている。畦畔を伴う水田遺構の検出は12遺跡であり、その他に上奈良遺跡で稲株痕跡の存在から水田面が確認されている。北部九州に伝来した稲作農耕の本州東方への伝播は、瀬戸内・日本海の2ルートに大別されており、京都府内では、淀川流域の京都大学構内遺跡(瀬戸内ルート)、野田川流域の蔵ヶ崎遺跡(日本海ルート)例が最も古い水田跡(弥生時代前期中葉～後半期)である。府内検出の弥生～古墳時代の水田跡は、1枚の水田が7～50m<sup>2</sup>の小区画水田である。小河川扇状地・氾濫平野の微高地周辺の緩傾斜地に営まれたこのような水田は、水田造成に際して1枚の水田面の高低差をなくし平坦化する労働力の軽減・節約に適應するものである。地形の傾斜度合いに応じて、急傾斜地では間隔が狭く、緩やかであれば広めに等高線に沿う畦畔(主軸畦畔)を築く。細長い短冊形の水田を湛水の度合いに応じて、再度直交方向の小畦畔で小さく区画している。このような小区画水田は、現在も山地で営まれている棚田にみられるところである。水田は一定の形態を長時間保つことはなく、地形・気候・労働力等の状況変化に応じて常に造り替えられていたことが、京都大学構内遺跡・水垂遺跡・内里八丁遺跡例に認められる。特に、水垂遺跡では、北端の細長い短冊形水田(旧水田)を方形水田区画に改める作業途中の段階が、畦畔の重複関係から確認できる。

その後、律令国家体制段階で農地は大きく変化していく。班田収授法に伴う条里制によって1町方角(109m)の径溝網と内側の規則的地割りがなされ、里(六町四方)・坪(一町四方)の区画単位による土地表示が実施される。条里制施行にあつては、以前の地形に応じた水田区画形態を改め、大規模な土木工事による区画整理に伴う長地型・半折型といった水田区画が現れる。府内では、棚次遺跡・古屋敷遺跡で条里畦畔が検出されている。条里区画溝・耕作に伴う溝跡群など条里関連遺構は、府内の相当数の遺跡で検出されているが、今回の水田遺構対象からは省いている。

2千数百年の間、人々の生活を支えてきたのは農業であり、その根幹は米作りに因るものである。水田遺構の検出は、先に述べたように洪水等の災害によって埋没放棄された事例が大多数を占める。災害に対して人々は復旧を行うのが常であり、水田も例外に漏れない。棚次遺跡・内里八丁遺跡では、水田を覆う洪水砂の上に更に水田を築いている。水田は或る時は急激に、また、通年の耕作で徐々に変化しているため、時期・時代の異なる水田遺構が何層にも重なって存在する場合が多い。徐々に変化した水田跡の検出は、土色・土質・沈澱集積物等の変化を見分けることで耕作土や畦畔を検出する作業となる。近年の水田遺構の調査では、堆積土壌におけるイネのプラント・オパール分析を本調査前に実施し、予備調査の時点で水田跡の存在を把握することも実施されてきている。今後、京都府

内の沖積地調査において、事前もしくは調査開始時点で微地形の検討・サンプル土壌の分析を行い、あわせて土層の観察を深めていけば、さらに多くの遺跡で水田遺構が検出できるとみている。今後、多くの遺跡で多様な時期の水田遺構の検出が行われるならば、過去の調査で明らかにされた集落等の遺構・遺物の関連など、新たな視点での生活の姿がより明らかになると思われる。

(たけはら・かずひこ=当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

○参考文献

- 1 金石 恕・佐原 眞編『弥生文化の研究』2-生業- 雄山閣 1988
  - 2 工楽善通『水田の考古学』-考古学選書-12 東京大学出版 1991
  - 3 正岡睦夫・高畑知功ほか編『百間川原尾島遺跡』2(『岡山県埋蔵文化財報告書』56) 1984
- 蔵ヶ崎遺跡
- 4 森 正ほか「蔵ヶ崎遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 京都大学構内遺跡
- 5 伊東淳史「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 森本遺跡
- 6 吉本堯俊ほか『森本遺跡発掘調査概報』長岡京発掘調査団 1970
- 鶏冠井清水遺跡
- 7 辻本和美・村尾政人「長岡京跡左京第151次発掘調査概要(7 K N E K Z - 6 地区)」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 中福知遺跡
- 8 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『速報展,91』パンフレット 1991
- 羽東師遺跡
- 9 長宗繁一・本 弥八郎「左京四条三坊」(『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1984
- 棚次遺跡
- 10 長宗繁一・鈴木廣司「左京五条三坊」(『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1985
  - 11 鈴木廣司「長岡京左京五条三坊」(『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994
  - 12 小田切 淳「左京第84・87次調査略報」(『昭和57年度 長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
  - 13 小田切 淳ほか「長岡京跡左京第87次調査概要(7 A N M T G - 3 地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第10号) 1987

財調査報告書』第1集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

14小田切 淳・原 秀樹「左京第107次調査(7ANMTG-4地区)調査概報」(『昭和58年度 長岡京市埋蔵文化財センター年報』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

水垂遺跡

15吉崎 伸・上村和直ほか「長岡京左京六条二・三坊・七条二・三坊・水垂遺跡」(『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994

16木下保明・吉崎 伸ほか「長岡京左京六条三坊」(『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1995

17吉崎 伸・木下保明ほか「長岡京左京六条三坊・水垂遺跡」(『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1995

上奈良遺跡

18榊井豊成・赤松一秀ほか「上奈良遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第16集 八幡市教育委員会) 1994

内里八丁遺跡

19竹原一彦「内里八丁遺跡の水田跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第41号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

20竹原一彦「①内里八丁遺跡-第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

21竹原一彦「内里八丁遺跡-第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

22竹原一彦「内里八丁遺跡-京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

興戸遺跡

23伊野近富「興戸遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

古屋敷遺跡

24鈴木重治・中井 公ほか「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 田辺町教育委員会) 1980

